

ロージン

ざわざわしている。まわりがよく見えない。でも、まわりにたくさん、いる。なにかいる。とても、いる。ざわざわしている。

これが、そうなの？　こういうかんじなの？

私は死んだ。らしい。それだけは、分かっている。

まさか四十代で人生が終わるなんて思ってもみなかった。未練がないといえは嘘になるけれど、運命は受け入れるしかない。自分なりに、ずいぶんがんばったと思う。

そして苦しかった。

仕方がない。

それ以外の言葉は、もう、ない。

それにしても、ざわざわしている。早くしずかになりたい。

だんだんまわりの様子が見えてきた。ざわざわしているはずだ。無数の「人だったもの」が、うごめきながらひしめいているのが見える。みんな光りながら、なにかを語っている。私になにか話しかけてくる「人だったもの」もいる。

え？　なんですか？　よく、聞こえない。

指が見える。なにかを示している。指の先になにかある。これを見ると、私に指示しているようだ。

文字？　文字を、感じる。あれは？

よく読めない。目をこらす。

「とりしまり係」？

いやだ、こんなところに来てまで、とりしまられるの？　私、なにも悪いことしてないわよ。

なにも悪いことしてない。

あ、と思った。また、思ってしまった。何万回思っただろう。そして、何千回、口にしてしまっただろう。

どうして、私が病気にならなきやいけなかったの？

どうして、私だけ治らないの？

なにも、なんにも悪いことなんか、してないのに……！

こんな言葉を煮返しては、どれだけ泣いたことだろう。どれだけまわりを泣かせたことか。

だけど、「悪いこと」って、なんだろう。「悪いことなんて、悪いことなんて」とだけ思ってた「悪いこと」って一体なんだろう。「悪」があるかないかなんて、そんなこと、どうでもいいことだったと、ここまで来てしまうと、思えてくる。なんであるに気持ちが悪へ悪へ、闇へ闇へとむかってしまったのだろう。

といって、だからどうしたらよかったのか、分からないし、もう考える気もしない。とにかく、すんでしまった。私の人生は、すんでしまった。

私は、身体がなくなった「自分」を、空気にそよがせて、ざわざわから遠く離れようとした。

とたん、なにかにつかまった。

「ちょっと待ってください」

「とりしまり」の文字が見えた。しまった、とりしまられたの、私。まあいいや。もう、こわいものはないはず。

「私は、なにをとりしまられるんでしょうか」挑むように訊いた。

「とりしまるって、あなた、これをよく読んでくださいよ」

白いてのひらが、ひらひらと文字の前で揺れた。文字をよく読むと、こう書いてあった。

『とりつくしま係』。

「あら。とりしまり係じゃなかったの。でも、とりつくしま係？」

「そうです、私はとりつくしま係」

とりつくしま係は、のっぺりとした白い顔に黒い穴を薄く開きながら、そう答えた。

「私は、とりつくしまの希望を聞いてあげているのです。あなた、とりつくしまを探しているでしょう？」

「とりつくしま？」

「そう、とりつくしま。私は、係ゝですから、一目で、とりつくしまを探している人が分かります。あなたは、とりつくまゝものを探している気配をおおいに出しています。

あなたが、その気配を出しているうちは、この世にあるなにかのモノにとりつくことができるのです」

「この世のモノ？」

「そう、なんでもいいですよ。思いついたモノを言ってごらんさい。モノになって、もう一度、この世を体験することができますのです。あなたは、それを望んでいるはずですよ。ただし、生きているモノはダメですよ。生きているモノには魂の先住民がいますからね。まあ、無理には言いませんが」

とりつくしま係は、話し終えると、穴を閉じた。

「分かったわ。ちょっと待って、今、考えます」

私は、自分が過ごしてきた家を思った。あの家には、今も夫の信司しんじと息子の陽一やういちが、二人で住んでいるはずだ。三十五年ローンを組んで買った、深緑色の屋根の、小さな家。二階の洋室に陽一が、一階の畳の部屋で私と信司が、眠っては起き、眠っては起き、していた。ずっとずっと、そうするつもりだった。

入院中に、治らない病気だとうすうす気がついてはいた。でも、またあの家で、眠っては起き、眠っては起き、を繰り返すのだと、病室から窓を眺めながら、ぼんやり

と思っていた。痛みに身体をゆがませながら、汗をかきながら、思っていた、あの家。信司と陽一は、どうしているだろう。信司は、一人暮らしが長かったので、もともと家事はけっこう得意だった。私の入院中も、なにも心配することはないよ、とずっと言ってくれた。陽一も手伝ってくれるし、と。

陽一。陽一は、いい子だ。そうだ、もうすぐ中学校の軟式野球部の最後の公式戦があるんじゃないかな。どこまで勝ち進んだのかな。試合をきつと見に行くねって、最後まで陽一には、言い続けたんだ。だから、練習、がんばってねって。きつといくからって。

がんばってね、か。

無責任な言葉だった。約束は果たせなかった。みんなに、エースなんだから、がんばれ、がんばれって言われ続けていたから、私くらいは、がんばらなくてもいいよって、言っただけでもよかったんじゃないだろうか。

「子どももいるんだし、がんばりなさい」って、病気の間じゅう、母に言われてあんなに辛かったのに、どうして、同じことを自分の子どもにしちゃったんだろう。辛さの垂れ流しだった。

もし、「とりつくしま」があるなら。私は思った。陽一のそばに、もう少しだけいてやりたい。見守ってあげたい。まだ、十四歳なんだから。

「陽一に」私は言った。

「陽一に？」とりつくしま係は穴を開いて、繰り返した。

「陽一のそばに、いたいです」

「いいですよ。息子さんの、陽一くんですね。陽一くんのそばにあるなにとりつきますか？ なにがいいですか？ 具体的に言ってください」

「そうですね……」

私は、陽一の身のまわりにあるモノを一つひとつ思い出していった。通学用の鞆、弁当箱、ペンケース、制服、帽子、バット、グローブ、靴、靴下……。

あの子の持っているものは、全部黒っぽいものばかりだったな。そしてみんなぼろぼろになるまで使いこんでいる。このぼろぼろの一つにとりついて、ほんとうに使えなくなるまで一緒にいることができるのだろうか。

でも。

でも、ぼろぼろのグローブや靴は、病気だった頃の自分の身体を彷彿ほうふつさせる。あんな

な思ひは、死んでいるけど、死んでも嫌だ。

「ほんの少し、一緒にいられるだけでいいんです」

私は相談するように言った。

「せめて、中学校最後の軟式野球の公式戦を見届けられるくらいに、一緒にいられば」

「そうですねえ」

とりつくしま係は、言いながら、二つの黒い目のような穴を開いた。

「それなら、なにか消耗品がいいんじゃないですか。その、軟式野球とやらの試合の時に使うもので」

消耗品。私は、その言葉をつぶやきながら、試合の風景を心に描いた。

「そうだ、あれ、なんていうのかな、あの、ピッチャーがボールを投げるときにぽんぽんって、手につけている、あの白い粉」

「それは、ロージンと呼ばれているモノのことですね」

「そう、それです。そのロージンに、なります」

「ロージンは、布のロージンバッグの中に入っているモノですが、では、あなたはあ

のロージンバッグの中の白い粉になるんですね。あれは、使っているうちにどんどん飛び散ってしまいますから、中身が半分以上飛び散ったら、とりつくしまではなくなりますよ。つまり、この世から、あなたは完全に、消えてしまいます。二度となくなにとりつくことはできません」

「いいです。その方が、いいんです。あの子にとっても、私にとっても。あまり、長くない方がいいんです。長くいすぎると、あとできっと、すごく辛くなると思うんです」

「ふむ」とりつくしま係は、二つの穴を閉じた。

「あっさりしていてよろしいですね。では、陽一くんが公式試合で使うロージンを、あなたのとりつくしまに設定いたします」

とりつくしま係は、てのひらをこすりあわせて、その間から一枚の半透明の紙を出現させた。

「これが契約書になります。これに、息を吹きかけてください」

「え、判子とかじゃなくて？」

とりつくしま係の黒い穴が笑った。

「そんなもの、持ってこられないでしょう?」

「そうでした。では」

半透明の紙には、「陽一 ロージン 軟式野球 公式戦」という文字が、光に透けて見えた。私は思いきり空気を吸い込むと、紙の上の文字すべてに息がゆきわたるように、ゆっくりと息を吹きかけた。息を吹きながら、自分がどんどん小さくなっていくのを、感じていた。

気がついたとき、私は炎天下の土の上にいた。指が、迫ってきた。あつ、と思った次の瞬間、陽一のとてのひらの上にあった。陽一が、もう一つのとてのひらを重ねてきた。

ぼんぼん。

私は、空気に少し飛び散った。

風に散りながら、なつかしい陽一の横顔を見た。泣きそうな顔だった。陽一は、いつもこうだった。緊張すると、泣きそうな顔になる。ずっとずっと小さな頃から。

身体は他の子どもたちより少し大きかったけれど、心はとても緊張しやすかったのを、私は知っている。

陽一は、誰よりも速く走れた。誰よりも速い球を投げることができた。だからみんな、がんばれ、と言ってくれた。陽一は、もともとがんばり屋だから、余計にがんばっていた。だからいつも、いつもいつも、顔が泣きそうだった。

陽一が、私を地面にたたきつけた。スコアボードが見える。六回裏、三対二。ツーアウト。ランナーはいない。

陽一が、投げた。ストレートだ。速い。

と、金属音が響いた。

陽一の靴が、私を踏んだ。ホームランを打たれたようだ。陽一は立ったまま動かない。三対三にスコアボードが変わったところで、キャッチャーがかけよってきた。陽一に耳打ちするように話しかけているのは、一番の友達たくまの琢磨くんだ。なにを言っているのかは、よく聞こえない。陽一は、なんだか、うん、うん、と小さく言っとうなずいているばかりだ。陽一、なにかもつと、言葉を言って。もつと声が聞きたいよ。でも、琢磨くんはすぐに、キャッチャーの場所へと戻っていった。陽一は、私から足を離し、少し土を蹴ると、また、てのひらの上に私を置いた。

さつきまでリードをしていたのに、私がかきたたんホームランを打たれて同点にな

ってしまふなんて。なんてことだろう。だけど、落ち着いて。てのひらの上から声をかけた。陽一は、そっと私を土の上に戻した。

陽一は、次のバッターを三振に押さえた。私は、ためいきをついて、守備交代の間、よく晴れた夏の青空を眺め続けた。きれい。空がきれいだ。こんなにきれいだ。たかなって、びっくりするくらいきれいだ。まぶしい。

私は、今度は相手チームのピッチャーの手にまぶされた。汗の匂いが、陽一とは違う。

指からボールにかすかにのりうつった私は、キャッチャーミットへとまっすぐにたたきつけられた。ミットにあたった瞬間、意識が空中に霧散した。バッターボックスには、陽一が立っていた。私は陽一のすねに、かすかに触れて、消えた。

マウンドのロージンバッグの中の私は、陽一のバットが空を切るのを見ていた。あの子が振っているバットは、黒い、カーボンのバットだ。駅前のミズムラスポーツと一緒に買いにいったつけ。十二歳の誕生日のお祝いに。あの時から十五センチは身長が伸びたけれど、私がこの世から消えていた間に、また少し大きくなった気がする。

陽一が、打った。きれいな放物線を描きながら、ボールはやんわりと飛び、センタ

一のクラブにすっぱりと収まった。

陽一がうつむきながら去っていくのが遠くに見えた。次にバッターボックスに立ったのは、誰だろう。ああ、あれは、あのガタイは、正春まさはるくんだ。まだ中学二年生なのに、百八十センチ近い身長があつて、筋肉もほどよくついている。陽一の弱小チームの原動力だ。

正春くん、打つて。そして勝つて。

私は、強く吹いてきた風に身体をどんどんさらわれながら、祈つた。

きれいな金属音がして、白い球が私の目の前の空を横切つた。

ホームラン。陽一のさっきの借りを、正春くんが返してくれた。

その後続いた二人が三振して、マウンドに陽一が戻ってきた。最初に私にふれたときより、手があたたかかった。私は、陽一のとてのひらの中で、はずんだ。たくさんの私が、空中に飛び散つた。

七回裏、相手チームの攻撃。中学校の軟式野球は七回で終わるので、ここを守りぬいたら、陽一のチームの勝ちだ。私は、落ち着いて、大丈夫、大丈夫、と陽一の足元でつぶやき続けた。

陽一は、二人のバッターをすんなりと三振にした。拍手が起こった。次が最後のバッターになるわね、と思ったのに、初球を打たれて、ヒットになった。次の打者は、ツーストライク、スリーボールまで追い込んだところで、ボール球を投げてしまい、フォアボール。次の打者は、なんとデッドボール。陽一は、帽子を脱いで、バッターに頭を下げた。そのバッターが一塁に進み、満塁になってしまった。バッターボックスには、ゆっくりと次の打者が近づいてくる。黒いヘルメットの下が目が、鋭く光っている。

このままこの子にヒットを打たれたら、サヨナラ負けになってしまう。

陽一、落ち着いて。

陽一はまた、泣きそうな顔を、と思ったら、かすかな笑顔を見せていた。キャッチャーの琢磨くんとなにかサインをやりとりし、軽くなずいた。そして、腰をかがめて私を手にとった。気持ちを集中するように目を閉じて、勢いよく私をてのひらに打ちつけた。私は、思いきり空中へはじけた。

あ、と思った瞬間、陽一の襟足が見え、ユニフォームの赤いベルトが目に入り、まぶしい太陽の光に刺され、なにも見えなくなった。

私は、とりつくしまをなくしたのだ。

ちよつと、ちよつと待って、待ってよ。あと、もう少しなのに。もう少しで試合が終わるのに。

あの子は、勝ったの？ 負けたの？

ああ、でも、どっちでもいいな。陽一は、とてもよかった。いい球だった。いい試合だった。これから、自分で考えて、自分で球を投げるんだ、あの子は。

私の、お母さんの役目は、もう、終わったんだ。ほんの一瞬だったけれど、最後にもう一度一緒にいられて、幸せだった。これでいい。

陽一、ほんとうに、さようなら。

夏空の光の向こうに、ゆくね。